３・１１原発事故

あの「3・11」から 5 年が経つ。この 5 年をじっくり振り返りたい。当時の雑誌や本、写真に目を通す。『世界』2011 年 5 月号は東日本大震災・原発災害を特別編集した。震災間もないころに集中して読んだが、5 年ぶりに再読した。哲学者の西谷修さんの論文が心に残ったので、一部紹介したい。

地震も津波も、ひとたび過ぎればそれ自体としては終わる。あとは救援や復興にとりかかることができるが、原発事故があるとそうではない。地震で非常停止装置が働いて原子炉は停止する。それで終わりではない。高熱をもつ原子炉を冷やし続けなければならないのだ。ところが地震と津波によってそのための手段はことごとく断たれ、非常用システムは作動せず、核燃料を詰めた炉心溶融のプロセスが始まってしまった。

原発は「停止」しても、必要な措置がなければそこから「崩壊」が始まるということだ。そしてその「崩壊」が放射性物質の拡散というコントロールの利かない惨事を引き起こす。自然の猛威がこの「必要な措置」の手段を奪っていた。だから「崩壊」を防ぐ（というより最小限にとどめる）ためのあらゆる措置は、必然的に「後手」に回ることになる。それはけっして今回初めてわかったことではなく、原発の設計段階から予測されていたことだった。ただし、その予測は「非現実的」として「想定外」に置かれていた。だが、自然はそのような都合のよい「想定外」に留まってはくれなかった。その結果、考慮から除外されていたことがとうとう「現実」になったのである。そしてこの「現実」は、津波が去ったそのときから始まる。「ザ・デイ・アフター」である。

この日から日本は変わるという印象は、この「予測」の破綻ということに結びついている。ありうる「危険（リスク）」を予測し、それにたいする「予防」策を講じる。それによって「安全（セキュリティ）」が確保されると見なされる。けれども、「予測」はいつも対処の技術的可能性と経済的合理性の側からあらかじめ枠を設けられ、技術的に難しいか採算が合わない事態は「想定外」に押しやられる。そして「合理的」な「想定」の範囲内で「安全」が確保されたとして、「安心して危険を冒す」レールが敷かれるのだ。そのレールに乗ってこれまで日本の社会は動いてきた。だが大地震の引き起こした津波は、その「予測」の堤防を易々と越えた。われわれがいま直面しているのは、津波によってであれなんであれ、われわれの社会を乗せているそのレールが無残に解体された状況なのである。

（2016 年 3 月 12 日）